



句集  
草  
笛

田邊  
風信子

目次

蒲公英	一
炎	三
野分	七
水脈	二二
母子草	二四
半夏生	二一
施身聞偈	二九
白鳥	三四
辛夷	三七
日盛	四一
烏瓜	四七
鳩	五二
歳晚	五五
昭和逝く	五七
黄砂	六
とまり木	六三
春日	六五
草笛	六八

夏蕨	七四
蝉しぐれ	七九
似我蜂	八三
秋霖	八五
鴉の贄	八九
刈田	九五
去年今年	九八
浅春	一三
花菜風	一七
行春	二二
卯の花腐し	二七
月の貌	二九
あとがき	二三

蒲公英

蒲公英の絮飛んで過去また一つ

けふ摘みし僅かな土筆里恋し

蚪蚪の水波紋は睡さそひつつ

げんげ田に置き忘れゐし夢一つ

春一番物干竿を離れけり

羽づくろひして遠く見る残り鴨

啓蟄のたとへば吾子の書くの字

炎

除草機を押すひたすらに単調に

地下道を出でて涼しき風の中

ひなげしの蕾の裂けて炎見ゆ

万緑のとほくに塵のごとき街

もの干す女陽の彼方から夏燕

少女の瞳何かを探す枇杷うれて

遠をゆく日傘の女ひるの街

海見る男うつぶす女砂日傘

三伏の半月重く上がりけり

夕焼とわれと運ばれゆく電車

野分

うす霧らふ街の底ひへ朝日しむ

電車待つ子の暇つぶし猫じやらし

ちちろ鳴く夜更け草田男句集読む

数珠玉の擦れあふ音をポケットに

秋風に向かひ心の纏れなし

水の帯ほどくる秋の河口かな

糸瓜忌の日あしの動く池の面

日のさして水底秋の深さもつ

団栗を握る子らの瞳輝けり

藁塚やハーモニカ吹きし頃遠し

二つめを食べて種無し柿と知る

来し方を顧みる夜の野分かな

朝まだき曇天のふと冬隣

水脈

飛び来り泳ぎひそかな鴨となる

日溜りの土手大いなる街見ゆる

簾星刻々と来る寒夜かな

玄翁の岩叩く瀬の春近し

冬晴や泡も芥も水脈の中

忙しき道すがらふと年の市

蠟梅や緩みはじめし空の張り

母子草

連風の昇りて天地おもふまま

歴史とは皿にのりたる桜餅

沈丁の十日もすれば匂ふべし

掬ひたる豆腐に春の滴かな

羽化しゆく遠つ国のあり二月尽

春昼の机の上にある図鑑

地を這ひて鴨ら発つ日の間近らし

かくもしづかな芽吹や神の木とあふぐ

蝌蚪の群なかへ中へと鬩ぎあひ

錆びつきし夢がここにも母子草

ぬるま湯の顎が上の花冷よ

春路の金平すこし夕餉とす

野の石は墓かも知れず涅槃西風

わが膝を子に任せおく目借時

春霖のそそぐ疎林の底にをり

なつかしき勾配の坂陽炎へる

大雪が雪の果とはなりにけり

花種を蒔くや少しは子に任せ

半夏生

葉桜の道やすらかに歩みけり

爪をきりゐて時鳥啼き始む

新緑の由布岳に向け子をかかぐ

子子の水は一気に零しけり

子燕の一口あけ皆開くる

桃食ふて童話に遠き日々であり

雨降るや路の葉蔭に山頭火

黄昏は向日葵の茎あまた見ゆ

思ひ出の糸つながらぬ蝉時雨

つかの間の季とはおもふ砂日傘

雨はれて午後の水が匂ひけり

扉を開けて炎暑の中へ歩み出づ

鼓虫の夕日を廻る単調に

行間の寂しさのごと額の花

子の大き瞳きらりと蟻潰す

窺ひつつ出て滑りゆく大蚯蚓

幼子の欲はぐくまる半夏生

投げ苗を水に滑らしつつ取りぬ

もじずりの巻けどとどかぬ空の青

風鈴のかるやかな音過去ほぐる

ふるさとに空還る日の百日紅

子ら睦む鋤形虫に喧嘩させ

一湾に尾根滑りこむ夕焼かな

施身聞偈

売れ残りたる灯笼のまはること

雨のふる刈田淋しむ鳥かな

棗熟れたり下町の家屋根低く

梨拾ふことばかり言ふ野分まへ

雨霧の方を武甲と指さしぬ

実紫霧の中よりあらはれし

秩父路やいたるところに柿熟れて

牛小屋の匂うれしき秋の旅

蟋蟀の近きが啼いて闇縮む

日の当たる菊の大輪身を正す

茅蝸の施身聞偈のひびきかな

葛咲いて川に遠のく思ひかな

秋の風吹き起こしをり捨びい玉

寝ころべば嬰の世界あり法師蝉

縁がはに何見る父か草雲雀

百の虫百種の闇を紡ぎあひ

白鳥

寒がらすピルの日当る高さ飛ぶ

少しくは麦踏もして近道す

冬の落萎みしほどに寄り添へり

冬トマト一人にて食ふ淋しさに

嬰の玩具になつてしまひし四温なる

白鳥の歩む滑稽をかなしみぬ

辛夷

人日の止まりさうなる掛時計

春寒の背筋のあたるのぼるかな

出違へし春一番となりにけり

咲き初めし辛夷が騒ぎみる真昼

ふらここに新顔一つ加へけり

逆らへる土に爪たて田芹摘む

読み終へし恵海旅行記雨水けふ

ふるさとの空気を吸へば風光る

青春のためらひに似て牡丹の芽

かへるごのたむる屯で犇めける

梟の玩具逆さま目借時

目借時仕事言葉のふと可笑し

日盛

子の尻のゆたかなりしよ天瓜粉

ルームミラー  
緑さす野が流れけり

病む父の涙の  
向う穂麦畑

麦藁に消えのこる  
風のほひかな

ふるさとの道やはらかし蛇莓

夕立に濡れて歩むも故郷好し

青蛙悟りしごとく背を伸ばし

べらあはれ原色まざと身を晒し

恥らひを何時知るや君の白きこだま

炎帝に尻叩かれて海山へ

忙しき農婦に無駄に道をしへ

入道雲なれも幼な子抱へゐて

飲み干して皆吐息つく生ビール

日盛の渚すなほな俺である

爪さきが渚へ向かふ炎天下

灯に垂れし紐もてあそぶ晩夏かな

晩涼やいつもの笛で汽車が発つ

烏瓜

秋なぎさ海星が裏で策を練り

河口をば見んと出で来て鯊釣す

鮮しきもの子の頬と膳の鯊

ベンチにて時潰しをり鱗雲

鬼灯へ両手をのばし蒙古斑

秋彼岸わが行方などおもはしめ

稲架といふ故郷に籬はめるもの

子ら遊ぶ広き刈田をわがものに

じねご掘る穴より昔の風の音

蟋蟀の渦巻く思考の奥へ鳴く

真似びたきものに子の笑み烏瓜

弓なりに日差を曲げて野分ゆく

海猫の群れてまた散る冬隣

鳩

一枚の半ば日当る冬田かな

冬麗といふ畦道のうら淋し

子の鼻に指触れて愛づ布団の中

よく見れば海も山もある布団かな

きこきことときにももの言ふ炭俵

押し花をふかく収めて日記果つ

群青の海に爪たて北吹けり

ふと亀の泳ぎとなりて鳩消えし

姿見の春待顔のこちら向く

待春の虚を突く夜半の汽笛かな

歳晚

行年や人來りてはまた去りて

子の寝ぬることたは易し夜半の冬

段島に海近く凧ぐ冬日和

朝日さす干潟したしや年の暮

深闇がかすかに震ひ去年今年

昭和逝く

日脚のぶ裏と表のたなごころ

遠くより冬日を背負ひて女が来

輪郭の一角くづれ雪の雲

冬の雨しづかに昭和流れけり

涸川にしづもる魚を見下ろせる

冬眠の熊さながらに一日過ぐ

冬暁に熱き塊として向かふ

着膨れに祖母平成も包みこみ

黄砂

暖冬の揺りかへしなる寒波けふ

昨夜の酔害羞極了牡丹雪

をさなごの多弁が主役鬼やらひ

両子路や先づ菜の花にいざなはれ

ゆふぐれの空気がよどむ雨水かな

半島の山並みひくく黄砂降る

とまり木

風のなきけふ白木蓮のひらき初む

木瓜咲いて農家に若き人を見ず

啓蟄のためらひはまだ土の中

春宵のとまり木にふとわが三十路

だしぬけのびちよびりりのはつねかな

春日

連翹の道つづくまで続くらし

春宵の脳裡は広し意志が住む

字 図 なる 道 の 途 切 れ に 蓮 花

泊 船 の ご と く に 夕 餉 花 づ か れ

子 の 吹 き し し や ぼ ん 玉 わ が 鼻 に 消 ゆ

蛇口から水がとび出す四月かな

げんげ田の燃えしづまりてより淋し

海鳴りやひなげしは日に首を垂れ

単純なる形なつかしチユーリップ

山吹や石にまぎれていしぼとけ

草笛

芥子坊主おのが行方にまどへるか

草笛に遙かなる旅おもはるる

麦刈に加はりたくて見てゐたり

蝦蛄を剥きつつ陰口も少し言ふ

ぼてぼてと音たてて鯖釣れにけり

さみだれや麦藁籠の思ひ出に

麵つゆに黄身がまざらぬ立夏かな

春宵のまはせば頸がこつと鳴り

モノクロとなりゆく春の日々惜しむ

桐の花無何有の夢果てしなく

夏風邪をかくも無用に重宝し

ふるさとの闇はや蛍の匂あり

浦島草何を釣らんか糸垂らし

竹籠に飛魚ひからびて海を向き

傷心の日々あり遠し蛙鳴く

夏畑や風に堆肥の臭ひくる

夏蕨

田蛙や見ずなりたるに火振漁

愚かなるわれに似る夏蕨摘む

われを見る瞳の美しや田搔牛

道をしへ俺も浄土へ連れゆけよ

越えたしといふ遙けさに梅雨の尾根

日のさしてあぢさゐの白あをみけり

あてどなき旅思ふ眼に額の花

空梅雨の帳尻の雨怖れをり

舟虫のときに重戦車のごと動く

旅人のごとき寄居虫と拾ひ上ぐ

海牛に鉤外しやる薄暑かな

桔梗の光る水面へかたぶける

窓外は梅雨傘さして歩まんか

あめんぼと水と暮れゆく山の池

蝉しぐれ

子の欲はふくらむばかり氷菓子

梅雨明けに幼児言葉の一つ減る

向日葵と一緒に立って海見をり

わがまへに津波のごとし青嶺立つ

炎天下いつもの歩みとぼとぼと

疲れ身に冷素麺を噉りこむ

人群が棺押し出す蝉しぐれ

団地より声沸き上がる花火かな

みな同じ闇を仰げる遠花火

迫りつつ淡くなりつつ花火消ゆ

似我蜂

立秋のずれたる眼鏡かけなほす

半ズボン脚にをさなごからませて

ふく風に虫啼きいづる出船かな

秋のなぎさ木片むなしく寄せかへし

高波を棒で叩く子野分あと

似我蜂もなりはひか巢に出で入りて

法師蝉日毎かすかに季移るふ

秋霖

哀 歡 に 遠 の く 三 十 路 曼 珠 沙 華

愚 鈍 と も 幸 せ か と も 秋 団 扇

秋 雨 や 遅 出 の 蟬 に い と ま な し

ちらほらと藪蘭が咲き野の秋意

白露かなみな収束のけはひにて

血より濃き檀特咲いて隔離棟

をさなごの瞳が籠の外秋の蝶

東京へ飛行機が発ついわし雲

夜の更けしネオンは淋し天の川

うまおひや灰皿に火をねじり消す

鴉の贄

喪服着し妻別の顔あきざくら

朝寒によそひし飯が匂ひ立つ

こすもすを真正面にて嗅いでみる

潮ひきし河口あらはに秋暑し

土の香の持論さておきとろろ飯

山ぎはに入り日あかあか稲の里

生きてゐる形に置かれ鴉の贅

酒場にてむなしく力む秋ふかし

ひもすがら畳にごろ寝そぞろ寒

梨食へばこの幼児にして静か

天高し山ふところに泪ぐむ

すすき原風生れつつさやぎをり

わが魂のいつか通はむ花野かも

装ひてほのかに紅や由布が原

山裾に草の紅葉せる小沼かな

音ひくくすすきがはらを風通る

刈田道まつすぐ川原へと歩む

刈田

交みたる蜻蛉ふれゆく由布の沼

柿熟れて村の木小屋は開けつ放し

家の灯が刈田へだてて二つ三つ

一年は空白に似て冬なきさ

冬鳥のばら撒かれたる河洲かな

由布岳の根つこの沼も眠りけり

日向ぼこ港の見ゆる位置占めて

去年今年

虎杖笛ときに研ぎすまされて泣く

棕櫚の間の海たひらかに冬日いづ

人知れず咲けるハツ手や人恋し

破蓮のとりのぞかれし平なる

冬暁の朱はけぢめなき海と空

づけづけともの言ふ勢子を恐れけり

日溜りとなりし裏庭にて遊ぶ

指さきは蜜柑剥き革命を讃ふ

柔らかき面差の君逝けり冬

マスクして校門くぐる余裕かな

着膨れの祖母に明治が匂ひけり

たばこの煙去年より今年へと流る

雪の積むあしたやかくも音のなし

窓外のいつもの空に凍てし雲

大氷柱草と根こそぎ抜けにけり

浅春

春立つや積木の城を子が誇り

浅春やゆふぞらは朱の沈澱し

早春はダークグリーン  
の雨が降る

ニン月や先ふくらみにひかる街

葛藤のなきごとく街春の霧

音のなく響るあしたパン焼きをり

黄塵や支那海とほく激ちるむ

ゆふ渚の灰色よどみゆく雨水

畦焼の火をまねくごとわが立てり

防風を食みつつ話俗を出でず

菜の花をみぎにひだりに国東路

花菜風

春雨や人為の土地は赤を帯び

沈丁花縮みつつガレージ開く

借景のはずが菜の花づくしかな

やうやくに摘みずぶぬれの春茸なり

春 茸 摘 む 山 に 和 し た る 形 に て

遠 く 来 し 友 眩 し け れ 春 茸 焼 く

幸 は た わ い な き も の 土 筆 食 ふ

春昼や堂にもたれて焼ぼとけ

山門を出できて花菜風のなか

くにさきの春愁にして焼ぼとけ

誰もゐぬらし禅寺も目借時

子に巢食ふわが罪に吹け涅槃西風

沙羅双樹いのる形に芽吹きをり

行春

春愁の心さまさま電車ゆく

いとけなき両手に春の泥をつけ

石楠花や村には村の時がある

幼子のいよいよまるく紫雲英つむ

白魚の喉もとすぎしいのちかな

春宵の音切り替はる冷蔵庫

付出しの花菜漬をばめでにけり

仕事場を夜更に出づる穀雨かな

こしのなく喉を落ちたり蚩烏賊

春風邪の子の吐瀉にしてミルクの香

囀りやとんとんと子が階下り来

赤きビーズを庭に埋むる子春の風

春愁のシヤム猫が欲しなどと思ふ

田平子の咲き旅心抑へがたし

卯の花腐し

惜春のわが眼のいつも遠く見る

卯の花や生意気すこし子の育つ

きらめける外より夏の匂かな

雨はれて風通ふ部屋夏きざす

卯の花腐し妻いでたちの香をまとひ

日雷まどぎは族の降りかへる

月の貌

夏の風ゆふべは街のにほひあり

その味も片仮名のやうパセリ食む

夏負の切つて棄てたきふくらはぎ

富士壺が月の貌してゐて秋思

緑濃き闇に懺悔の身を捧ぐ

凍てし身の中にめぐりに時が過ぐ

いきり立つ津軽の海や黒き冬

根深汁ほろり仁義の味のする

しんしんと風花の舞ふ時空あり

行火抱き昭和はとほく偲ぶもの

## あとがき

本集は、すでに刊行していた第一刷版に、一定の加筆修正を加えた第二刷版の「草笛」である。まとめていて、懐かしさ溢れるものがある一方で、自分の非力と俳句の難しさを改めて痛感させられた。

本集は、稚拙は禁じ得なくとも、私にとって大切な生きの証である。作品の一句一句に、忘れがたい背景を背負っているからである。

いま、私は還暦への日々を消化しつつある。これまで、紆余曲折は多々あったにせよ、何とかこうして生き延びて来られたのも、一句一句に感情を吐露させた俳句の賜物ではないかと内心思っている。

これから、私は人生の仕上げをしなければならぬが、その上でも、俳句は意志の検証確立を支える一つのリトマス試験紙として重要だと思ふ。

これからも、多くの友人や家族、そして常に私の心の支えとなっている故郷両子を大切にしながら、進んで行こうと思う。

二 一 一 年 夏

田辺風信子

## 書房アンテクス理念

近年、社会が経済至上の傾向を呈して久しく、この間人々は生産より消費へ不易より流行への歩を速めてまいりました。そして時代の流れは、わが国に営々と培われてきた精神文化をも呑み込み、いまや物的価値尺度が社会に遍く浸透しております。

一面、かすかながら新たな兆しもうかがわれます。明らかに不利な立場から正義を貫く法律家や、人道援助に生涯を掛ける活動家、また身体の不利益を反転し周囲に勇気を与える青年や、地域社会への奉仕に地道に取り組む個人の活動、等々であります。

こうしたなか、私たちはここに、ヒューマンズあふれる社会の構築を高く掲げた書房アンテクスを弊社内に興し、地方にあつて文芸、哲学、種々の芸術等に励む人々の活動を、良書の普及や刊行等を通して支援すべく歩み始めました。身近に営まれる文化活動を全国の同胞とともに共済し、新しい文化の形成へつなげようとの熱意からであります。この趣意が理解を得られ、新しい時代の潮流となるよう念願してやみません。

一一一年六月

代表社員 田邊誓司

## 著者略歴

田辺風信子（誓司）

### 【略年譜】

- 1952年 大分県国東市安岐町両子に生れる。
- 1975年 長崎県立国際経済大学（現長崎県立大学）卒業。
- 1982年 俳句を始め現在に至る。
- 1985年 歩道短歌会入会。
- 2009年 現代歌人協会員。

### 【著 書】

- 句集「草笛」（近代文芸社・日本俳人文庫22集）
- 歌集「菜花爛漫」（短歌新聞社）
- 随想「風立つ村」（れんけい社）
- 写生短歌研究「存在価値固定詳論」（聴風舎）
- 句集「帰郷」（聴風舎）
- 句集「草笛」（書房アンテクス・第2刷）

句集 草 笛（第2刷）

---

---

平成23年7月1日発行

著 者 田 辺 風 信 子

発行者 河 野 昭 治

製作所 書房アンテクス

発行所 会社・国際化支援事業所アンテクス（同）

〒192-0907東京都八王子市長沼町178番地42

電話（097）536-0260

---

---

e1000（税込み）